

エティエンヌ・ダルモン、ジャン・カリエ著

「石油の歴史 ロックフェラーから湾岸戦争後の世界まで」文庫クセジュ

白水社 2006年8月5日刊を読む

グローバリゼーションがもたらしたもの

1. グローバリゼーションの影響のひとつは、石油産業における機能上の制約が軽減、さらには廃止されたことである。以前は、こうした制約を課すことは重要だと、ほとんどすべての国々で考えられていた。
2. 多くの西ヨーロッパの国々では原油および石油製品の輸入に関する管理は廃止され、国内価格の自由化が確立され、あらゆる形態の量的規制は姿を消し、既存の独占は廃止された。
3. かつての国営企業は民営化され、一般的にその資本の多くは民間導入者へと売却された。OMV (オーストリア)、エルフ(フランス)、レプソル(スペイン)の3社はいずれも1991年以前からすでに民営化が始まっており、続いてENI(イタリア)が1998年6月に民営化開始、スタットオイル(ノルウェー)は2001年に資本の17.5%が市場で売却されて民営化の端緒となった。
4. 日本での規制緩和は似たような変遷をたどり、1992年4月に石油精製に関する割り当て量が廃止され、96年4月には石油製品の輸入統制が廃止された。
5. 実際に、イギリスとノルウェーを除いて、すべての西ヨーロッパの国々は日本とまったく同様に、石油を輸入する工業国であり、これらの国の自由化が関係するのはおもに下流部門(石油精製、国内外での取引)である。
6. 産油国における自由化の程度を評価するおもな基準は、外国企業が上流部門(探鉱・開発生産)に外国企業が受け入れ可能な経済的条件で参入できる可能性である。
7. 国営企業が意思を受けていた独占状態が多少なりとも普及していたことを考慮すると、1980年代末の時点では、国際企業は世界の石油備蓄の約15%に対して独自の活動を展開できていたにすぎなかった。
8. この状況はすぐら変わっていった。ソ連の崩壊の直接的な影響として、カスピ海の豊富な埋

蔵石油が外国企業による探鉱に開かれたほか、特殊な事例となるロシア連邦の市場経済への移行が進んだ。

P146

9．続いて、数多くの産油国も外国企業へと門戸を開いた。

10．こうした変遷があって、国際企業の自社活動による石油備蓄量の比率は 15 %から 40 %に上昇した。

11．外国の石油企業に対していまだ門戸を閉ざしているのは、サウジアラビア、クウェート、メキシコの 3 か国だけである。

P147

[コメント]

人類のエネルギーの未来はグローバリゼーションの進展で一体どうなるのだろうか。石油資源と原油産業、人口爆発と技術の進歩の状況に関心をもち続ける必要を感じる本書だ。

- 2009 年 4 月 5 日林明夫記 -